

世界を変える ライブエイドの夢

佐藤 修

(株)コンセプトワークショップ代表



加野寿恵

弓管理コーポレーション創設準備会代表

●プロフィール

1961年福岡県生まれ。久留米耕の老舗“もめんや”のひとり娘。高校卒業後、単身米国に遊学し各地を転々と学び歩く。その過程で立ち寄ったニューヨークの創価学会で宗教への関心を高め、帰国後いくつかの宗教を遍歴するが、どこも同じであり派閥にしかすぎないことに失望。結局、神は個人の心に住んでいるという思いに達し、宗教組織から離脱。社会に対する自らの役割を模索中。東京青年会議所国際室のメンバーとしても活躍中。

加野寿恵はとびっきり素直な人だ。社会にも自分にも素直に生きている。子供の感性と無邪気さがあふれている。大人の分別くさい現実感覚はやや欠落しているが、子供の頃の輝きや夢を失うことが大人になることならば、大人の分別など価値がない。

彼女の素直さはひとり娘として大切に育てられたからではない。むしろこれまでの人生は波瀾に富んでいる。高校時代は辛いこともあったし、世の中に失望したこともある。20歳の時に米国を転々としたのも、自分の勇気を鍛えるためだった。そこで宗教との邂逅から、10年近くにわたる宗教活動が始まるが、そこで彼女は内なる神と出会う。それが彼女の素直さの根源だろう。真剣に生きていれば勇気と素直さは身についてくる。

こう書いてくると、マザー・テレサのような人をイメージするかもしれない。とんでもない。そうではないのだ。彼女は半端ではないロック好きの現代っ子だ。乳離れしない時からモンキーズやビートルズで育った世代である。宗教組織に失望した時に、その潜在意識が頭をもたげたらしく、以来、今度はロック遍歴が開始された。と言っても、気移りなにかファンではない。明確な夢と志がある。

音楽が子供たちに与える影響は学校の先生よりも大きい。いい音楽がいい社会をつくっていく。これが彼女の考えである。社会にとって音楽の意味は大きい。だが、その音楽の世界を知れば知るほど、彼女の気分は重くなる。音楽の世界もまた世相を反映

して歪んできている。そんな気がしてならない。

いい音楽が世界をよくする

“We are the world”が発端になって世界各地をつなぐ“Live Aid”が開かれたのは1985年。アフリカ飢餓救済のためのチャリティコンサートとして大成功を収め、ミュージシャンが社会活動に参加していく契機となったことは記憶に新しい。音楽は人々の心の中の神々を目覚めさせる力を持っている。だが、最近の音楽はどうだろうか。パンクやヘビメタが悪いというのではないが、疲れる音楽が増えてきた。ロックも例外ではない。そこに彼女は、管理社会から疎外されたミュージシャンたちの被害者意識の影を見る。社会をよくするはずの音楽が、逆に社会に負けて輝きを失っている。関係を逆転させなければならない。そのためには舞台が必要である。

ミュージシャンたちが本当にのびのびと自らの心を表現できる“Live Aid”を日本で実現することが彼女の夢である。いい音楽を世界に送り出せば、必ず世界はよくなる。それこそが、経済大国となった日本の役割ではないか。企業も最近はメセナ活動に力を入れてきたが、その多くはクラシック。しかし、現実の影響力を考えればロックやポップスにもっと関心を向けるべきだろう。若者たちが聴く音楽に社会はもっと関心を持つべきだ。それが次の時代を決めていくのだから。彼女の夢に加担してくれる企業はないだろうか。(TEL&FAX:03-3411-2593)